
空白のふたり

Lna

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空白のふたり

【コード】

N9197W

【作者名】

Lna

【あらすじ】

大切なおばあちゃんが死んでしまって、残されたふたり。血が繋がっていないことから、小さな恋の蕾が開くか…

ブログ的な（前書き）

どのタイミングで投稿できるかわかりませんが、時間があつたらちよこちよこ書いていきたいです。

若干暗めになってますが、日常は明るいです。
ドタバタする予定です。

プロローグ的な

恥ずかしながら。

自分はおばあちゃんっこである。

それも血のつながりがなくても。

堂々と胸を張って言えるだろう。

だって自分は、おばあちゃんと海羽みづと生きてきたのだから。

初瀬はつせ罹麻らまはとても賢い少年だった。

また、その中性的な美しさと儂さ、その幼さからは考えられない聡明さ。

それらを持ち合わせていた。

しかし罹麻の両親は、息子の才能よりもお金のほうが欲しかったらしい。

とある大学の次世代のための有能な子供を集めていた研究グループとやらの簡単に親権を渡した。

金額は三千万だったと思う。

記憶が確かではないので多少盛っていたりするだろうが、自分の金額なんて知ってどうこうなるものでもない。

結局、自分がその大学にいたのは十日間にも満たなかっただろう。

自分は逃げ出した。

毎日毎日わけのわからない記号の意味を覚えさせられ、知らない言語で話しかけられ、理解が遅れると懲罰がある。

懲罰も、食事抜きなどの可愛らしいものではなかった。

自分が憶えている中で最も酷かったのは白い部屋に閉じ込められたことだと思う。

あの細菌一つなさそうな潔癖な部屋に一時間。

時間の感覚すら失っていく恐怖。

思い出すだけでも全身が粟立つ。

十日目の早朝に、逃げた。
もともとセキュリティは wasn't だったからか、簡単に逃げ出せた。
その後の計画も立てていた。
いや、その後の計画は失敗に終わるのだが。
少しは大人になった今ならわかる。
あのころは世の中を甘く見ていた。
そんな簡単に人が救われていいはずがないんだ。
まして与えられた運命から逃げてきたような人間なんて、救われた
だけで奇跡なんだ。

逃げ出して3日が過ぎた。
今思えば3日しか過ぎていないのだが。
空腹は限界だった。

今まで特に生活に困っていたことがないからか、ここまで空腹がつ
らいのかと正直驚いた。
人間は空腹で死ぬ。

知識としては持っていたが、実際体験してみるとつらい。
あと何日で死ぬんだろう。
そればかり考えていた。

雨が降れば1か月はもつとか、くだらないことばかり考えていた。
そして、自分の手もかすんで見えてきたころにはあちゃんに救われ
た。

「…あら？行き倒れ？大丈夫？」
少しかすれているがきれいな声が頭上から降りかかる。
わずかな意識の中でつぶやいた。

た、…すけ、て

おばあちゃんと、義妹誕生。(前書き)

さて、やっとたのしくなってます。
まだ過去編的な感じですがね。

おばあちゃんと、義妹誕生。

目が覚めるとそこは天井だった。

そりゃ、寝てたんだから…。

目を何度かあけたり閉じたりする。

何も変わらない。

や、変わったら困るけど。

「あらあら起きたの？」

素敵なご婦人が自分を覗き込んでいる。

きれいなほどに色素の抜けた白髪、黒く澄んだ瞳、しわはありついても艶やかな肌。

「えと、あの」

言葉が出てこない。

「お腹空いてるんでしょう？今ご飯作るから待っててね」
優しく微笑んでくれる。

なぜか安心した。

「おにーちゃん、おなまえは？」

子供の幼い声が聞こえる。

しかしあたりを見回しても誰もいない。

「おっ、おなまえは?!」

どうやらドアの向こう側のようだ。

恥ずかしいのか隠れたまま姿を見せようとしてくれない。

「罹麻だよ。初瀬罹麻」

「……………」

無言。

返事してよ…。

自分より年下に無視されるって思ったよりきついなー、などと考え
ているとあのご婦人がやってきた。

「へえ、罹麻くんっていうのね。」ご飯、持ってきたから食べてちよ

うだい」

「ありがとうございます」

おずおずと礼を言っつて食事に手を付ける。

「おいしいっ…」

今までの食事はなんだったんだというほどおいしかった。

「あらまあ、私の食事をおいしいだなんて、よっぽどお腹が減つたのね」

ご婦人は可愛らしくクスリと笑った。

今まで食べなかつた分を補うように、胃に流し込むように食べた。食べ終えて一息ついたところで質問された。

「それで罹麻くん、聞きたいんだけど、なんであそこに倒れていたの？」

それはいつか質問されると思っていたのでありのままを話した。

もちろん、売られた云々は飛ばして。

自分の売られた話なんて自分でできていていい気分じゃない。

ご婦人は話を聞き終えると手を叩いた。

「行くところがないなら家に住むといいわ！やだ、孫がもう一人増えたみたい！海羽もお兄ちゃんができてよろこぶわ。ふふっ、そうとなつたらいろいろ用意しなくちゃ」

少女のように騒ぎながら部屋の外に出て行ってしまった。

「海羽ちゃんっていうの？」

まだドアの外に隠れている女の子に声をかける。

「おにーちゃんは、いくつ？」

逆質問だった。

いや、別にいいけどさ。

せめて質問には答えてほしいかもな。

「11だよ。海羽ちゃんは？」

「き、きゅっ」

「9歳か、2つ違いだね」

「……………」

もう無言がっらいんですけど。

ご婦人が帰ってきました。

何やらハイテンションです。

「さ、今日から罹麻くんはうちの子だよ！」

そんなわけで、おばあちゃんと義妹ができたようです。

おばあちゃんと、義妹誕生。(後書き)

てなわけで、あと少し昔話続きます。

もう少ししたら、ふたり暮らしが始まります(ニヤリ)

最期、そして現在。(前書き)

これで過去編終了です。

最期、そして現在。

おばあちゃんの家で過ごすようになって5年。
海羽とも兄弟的な関係を築き上げてきた。

「おにーちゃん、毛布とって」

「はい」

「おにーちゃん、ご飯はまだ？」

「今すぐ作る」

「おにーちゃん、本」

「どうぞ」

う、うん、兄弟的な関係を築き上げてきた。

主従関係とか思ったやつは勘違いだ。

俺たちは兄弟だ。

しかし、元気だったおばあちゃんも年々衰弱してきている。

数年前から医者に通ってもらっている。

その医者にはもう長くないといわれた。

それについては海羽も知っている。

そして、おばあちゃんも多分気が付いている。

気が付いていないふりはしているけど、早朝はいつも窓の遠くをどこか寂しそうに眺めている。

この5年で俺たちは成長してきたはずだ。

そう思っつて、海羽も俺も口には出さないがかなりおばあちゃんがいなくなってしまうことを不安に思っている。

俺たちふたりでは何もできない。

それは、おばあちゃんが床に臥せてから痛いほど理解しているつもりだ。

海羽もやることはきちんとやっている。

俺もやることはきちんとやっている。

それでも、何かが欠落している。
何かはもうわかりきっているのだけれども。
それは、もうどうやっても戻ってこない。
おばあちゃんの病気は治らない。
おばあちゃんは、そのうち死ぬ。
わかってる。
それでも、その日はやってくる。

その日はなぜか早く目が覚めた。
なんでだろう。
わかってた。
海羽も起きてきた。
虫の知らせってこういうことなのかもしれない。
おばあちゃんは幸せそうに眠っている。
もう起きてこないけれど。
窓の外も眺めてないけど。

おばあちゃんは死んじゃった。
海羽も俺も口にはしない。
でも、理解はしている。
もうだれにも頼っていけない。
ふたりで生きていくしかない。

おばあちゃんの葬式は、俺と海羽とおばあちゃんの3人で行われた。
誰も泣かない代わりに、空は大泣きだった。
いや、雨のおかげで涙が見えなかっただけかもしれない。

葬式の夜はふたりで寝た。

向かい合って誓った。

ふたりだけでも、立派に生きていこう、と。

最期、そして現在。（後書き）

次からはふたり暮らしの開始です。

おばあちゃんの家で、どう暮らししていくのかしら…

自覚。(前書き)

仲のいい兄弟って憧れます。

自覚。

「おにーちゃん、おはよう」

目を開けると海羽が目の前にいた。

30？近づけばおでこが触れ合う。

それでも海羽は無防備に目をこすりながらあくびをする。

長い睫、透き通るような白い肌、美しく光る黒髪、すらりと伸びる長い手足。

女の子として必要なものはほぼすべて持っている。

「…おはよう」

今までならなんてことなく流してきた海羽の一挙一動が気になる。

ここまで可愛い生き物だったか、コイツ…

今はおばあちゃんがいない。

つまり家に二人で暮らしているわけだが、耐えられる自信はあった。いやむしろこんな妹にそんな気起こすかつーの、と思っていた。でも。

もう自信なくなってきた…

おばあちゃんがないということ、監視してくれる人間が消えたのだ。

よく考えれば大問題である。

つーかなんで今まで気が付かなかったんだよ。

考え直すタイミングはたくさんあった。

もともと身寄りのない俺たちに行くあてはないが、それぞれ働いて家を借りるということもできたのだ。

それでも、おばあちゃんを忘れたくないということ、この家に二人で残ったのだった。

しかし、いまさら後悔しても仕方ない。

海羽が俺から奪っていたタオルケットを…

「ちょっと待て、なんでお前ここにいるんだ？」

冷静になつて考えれば海羽が俺の部屋にいること自体がおかしいんだよ。

ぼけつとしている海羽を揺する。

「うん、おにーちゃん、起きた？」

「いや、お前が寝てたんだが」

そう言つて海羽をベッドから引きずりおろす。

「ああ、ダメ！ふとんー」

じたばたと暴れる海羽をひよいと抱え上げると暴れなくなつたが、代わりにものすごい罵倒が心に突き刺さつた。

「何してくれんのよ、この変態兄貴！重いんだからっ、ちよ、どさくさに紛れてどこさわつてんのっ！おろして、おろせ、今すぐおろせ！」

「うっさい、耳元で騒ぐなっ、っーか俺はどこも触つてねー、濡れ衣だ」

「触つたよっ、お嫁に行けなくなつちゃうじゃない！！」

「へー、そんな風には思えなかつたけどな」

「なっ、失礼な…、あるわよ！見えないかもしれないけど、あるのよ！！」

「どこだ？俺には触つた限りわからなかつたけどな」

「なっ、やっぱり触つたんじゃない！このっ変態！あつち行け！」

「だから、お前のその貧相な胸なんて触つたつてわかんねーんだよ」「ふざけんなし！おにーちゃんには罪悪感つてないの？！」

海羽の細い体を落としてしまわないように慎重に運ぶ。

海羽の部屋は俺の部屋の隣で作りもほぼ同じだ。

ドアを開け中に入る。

久々の海羽の部屋はまたいつそう女の子らしくなっていた。

海羽をベッドの上におろすと海羽はアメーバのようにぐでーんと横になる。

パジャマの襟から覗く鎖骨が妙に艶めかしい。

何故か頬が熱くなつてきた。

耐えられなくなり視線をそらす。

「おにーちゃん」

昔のような海羽の幼い声が聞こえた。

ふいにそんな声が聞こえたので振り返ってしまった。

振り返った先には若干涙目の海羽がいた。

おばあちゃんが死んでしまっから毎晩泣いているのは隣の部屋から聞こえていたので知っていた。

しかし面と向かって泣かれるのは、これが初めてだった。

「なんでおばーちゃんは死んじゃったの？ねえ、なんで？いやだ、寂しいよ……」

泣き出した海羽を見て俺はひどく動揺していた。

どうすればいいかわからなかった。

いきなりのことだった。

ただ、目の前の大切な人を傷つけたくなくて、傷ついてほしくなくて抱きしめた。

これは兄弟でも許される行動かはわからなかったけれども、今なら許される気さえした。

抱きしめて思った。

家族でなくとも、兄弟でなくても、海羽は俺にとって大切な人間だと。

腕の中で静かに泣いている女の子はもう、女の子でなくてひとりの女性としてしか見られなかった。

俺は海羽を好きだと、自覚してしまった。

もし許されるのなら。

もし海羽に好きな人ができなければ。

もし俺のことを好きになっってくれるのならば。

俺は海羽と生きていたい。

そう思った。

自覚。
(後書き)

なんだか話が飛んでいってますが、そのうち軌道修正します。
次からは海羽視点でいきまーす。

一緒にいたい。(前書き)

うーん、語りが幼いかもしれませんが、
仕方がないかな…。

一応十四歳の設定なんですけどね。

一緒にいたい。

好き。

好きなの。

だから、もっと一緒にいてほしい。

部屋でひとり呟いてみる。

たぶん隣の部屋にいるおにーちゃんは寝ている。

寝ていなくても、聞こえていてもいいけど。
すき。

なんで気づいてくれないの？

こんなにも私はあなたが好きなのに。

朝だって、精一杯誘惑してみたのに。

…魅力ないのかな？

私たちには兄弟と示すものもない。

ほかに親戚もいないのだから世間体だって気にしなくていいではないか。

なのになんでそんな修行僧みたいに無反応なの？！

いやになっちゃう。

そこにあつたクッションを抱きしめる。

顔を埋めてぼつり。

「すきだよ」

伝わらない。

言葉にしていけないから仕方ないのかもしれないけど、少しは感づいてもいいんじゃないかな？

昔からおにーちゃんはあんまり表情を表に出すことはなかったけど、最近はましになってきたと思う。

私はおにーちゃん的笑顔に一目ぼれしたんだから。

おばーちゃんの家に来て、この家に来て半年たった夏の日のこと。今でも覚えている。

私はその時夏風邪にかかってしまっていた。

おにーちゃんは無表情ながらも私を一生懸命看病してくれた。

その時の幼かった私は言ってしまった。

「おにーちゃん、かお怖い」

そのとき、おにーちゃんはごめんていった。

でも、ただのごめんじゃなくて。

「ごめん」

つて、はにかんでいった。

そのあと、私は恥ずかしくて真っ赤になっちゃったんだけど、すごく素敵な、自然な笑顔だった。

ああ、こんな顔もできたんだ。

そう思うと、なんだかおにーちゃんが愛おしくてすごく好きって思えたんだ。

おにーちゃんは私のことをどう思っているんだろう。

ふたり暮らしになってからあまり一緒にいない。

おにーちゃんは部屋にこもってしまっ。

だから一緒にいられない。

私としてはすごくさみしい。よし。

心の中でつぶやいて改めて口にしてみる。

「勝手に部屋に入るくらいいいよね、一回目だし」

私はおにーちゃんの部屋の前まで行き、深呼吸をする。かちゃり。

ドアを開くとベットでおにーちゃんは寝ていた。

「仕事してると思ったんだけど…」

おにーちゃんは専門の知識がいるが家でもできる仕事をしている。

内容はよくわからないが、かなりの知識量が必要らしい。

一度聞いたことがあるがはぐらかされた。

使っている道具からして、絵描きか小説家だと思う。
鉛筆とスケッチブックと原稿用紙。

いったい何をしているのだろう。

今はスケッチブックにたくさん羽が書いてある。

原稿用紙は白紙だった。

眼鏡を外していないので、仕事をしたまま眠くなって寝てしまった
ようだった。

電源入れっぱなしだし。

そう思つてスイッチを切る。

おにーちゃんは自分が思つているより格好良い。

ていうか世間一般から見てもかなりの美青年である。

年の割に落ち着いた雰囲気とさらりと揺れる髪の毛。

よく考えて選んでいないであろう黒縁の眼鏡も顔にあっている。

小さいころからきれいな顔立ちをしていたが、今は一層磨きがかか
っている。

ベッドで寝ているおにーちゃんの髪の毛に触れる。

そして撫でる。

男の子とは思えないほど艶やかな髪質で、かなり憧れる。

おにーちゃんは私の髪をきれいと言ってくれるけど、おにーちゃん
のほづがもつときれいだ。

「んう…、誰？」

やばっ

起きるとは思わなかった。

逃げようと思ひ立ち上がると手首をつかまれた。

怒られると思つていた。

しかし驚きの一言がおにーちゃんの口から放たれる。

「待つて…」

一緒にいたい。(後書き)

海羽みづがかなり幼くなっちゃいました。

おにーちゃんが手首をつかんだ後はどうなるの?!

その?海羽を抱きしめる

その?おばーちゃんと勘違いして甘える

その?勢い余ってKISS!?

いや、悪ふざけが過ぎました。

?と?は、そのあとが気不味すぎるような。

まあ、どうなるかわかりませんw

疲労困憊。

えっ…？

おにーちゃんが私の手首をつかむ。

かなり強い力で、しっかりと固定される。

「痛いよ、おにーちゃん…」

呼んでも返事が来ない。

おにーちゃんのさらさらした髪が揺れる。揺れる。揺れる。

そして、ベットから転げ落ちた。

「うわっ…！」

今まで腕一本で自らの体を支えていたため、床にどさりと倒れた。

「え？え？何？どーしたの？」

やばい、私今めっちゃ混乱してる。

とりあえず落ちたまま動かないおにーちゃんをベットに戻そうと思うが、力が入ってない人間を持ち上げることは細い海羽^{みづ}には難しく上半身すら持ち上げられない。

気が付くとおにーちゃんは肩で息をしていた。

「大丈夫…夫？」

おにーちゃんの頬に触れる。

…熱いかも

いそいでリビングから体温計を持ってきて床に寝かせているおにーちゃんに刺す（あまりの勢いで行ったため刺すという表現でも間違いない）。

ピピツという電子音とともに海羽は体温計を見る。

38.6

これから上がってくるかなー。

とにかく氷枕とか布団とかやらなきゃいけないわけだから準備はし

ておこうと思い、部屋を出ようとした時だった。
がさつと衣擦れの音が聞こえた。

「海羽…、寝てれば治るから」
何を言っただこの男は。

昔から体が弱かったおにーちゃん。

今ではそんなに熱を出すこともなくなっただけど、ここ最近忙しかっ
たんだから発熱してもおかしくない。

なんで気づかなかったんだろう。

悔やんでも悔やみきれない。

私はおにーちゃんの時もお世話になったお医者さんに電話してみた。

「はい春崎医院です」

「もしもし、六番街の、」

「ああ、海羽ちゃん？お久しぶりー、で、今日はどんな用件で？」

「おにーちゃんが熱出しちゃって…」

「あら、ほんとに久しぶりだ…何度くらい？」

「38・6 です」

「それはそれはよかったわね」

「いや、よくないですよ」

「そうかしら、人間少しくらい異常がないとそっちのほうが大変よ」

「そんなことどーでもいいです」

「はいはい、今からそっち行くから」

「ありがとうございます」

「罹^{しお}麻くんにはおとなしく寝ててもらって」

「はい！」

「んじゃ、後程」

そう言っただけガチャリと切れてしまった。

おにーちゃんの部屋に戻る。

おにーちゃんはベットに戻っていた。

どうやら自力で戻ったらしい。

布団はもうかける体力が残っていなかったらしい。

少しだがこの短時間で悪化している気がする。
早く春崎先生に来てもらわないと
焦る。

本当に焦るべきはこっからどーするかなんだが。
その理由は…

「遅くなつたわね!!」

その理由は治療方法に若干疑問はあるが凄腕の医師、春崎梢先生の
登場だった。

疲労困憊。(後書き)

うーん、うーん、春崎先生に関してはもう少し男っぽくても良かったかな…と思っています。

嵐の到来。

彼女はこの町唯一の医者である。

もともと都市部で働いていたのにこの地に配属されたいらしい。

まあ、彼女の性格からして都市で働くにははっちゃけすぎている、と思う。

言っていないか悪いかわからないが、春崎先生は凄腕の医者だ。

どんな病気でも治してしまうといっても過言ではない。

しかし、その治療方法がどうしても受け入れがたいものなのだ。

風邪をひいた時は、つばつけときゃ治るわよ。といい、

骨折した時は、つばつけときゃ治るわよ、そんなの。といい、

ものもらいができた時は、つばつけときゃ治るわよ、それくらい。

このようになんでもつばをつければ治るといふ先生である。

実際はきちんとした薬を処方してくれるのだが、それも怪しい色をしている。

本人いわく私のつば入りだそうだ。

そんな先生が家にやってきた。

「どれ、病人はどこかいな」

楽しそうに微笑みながら真っ直ぐにおにーちゃんの部屋へ向かう。

どこか探しておきながら知っている。

先生はおばあちゃんかかりつけの医者でもあったから。

そもそもは幼いころ体の弱かったおにーちゃん専用の医者みたいなものだったけど、最近はおばあちゃんにつきつきりだったし。

部屋も忘れていると思っていた。

もう脳みそはおばさんだと思ってたのに

「誰がおばさんだ、ガキ」

まるで妖怪のように心を読まれた。

おにーちゃんの部屋に着くと早速診察を始めた。

触る。

撫でる。

触れる。

なんていうか、エロくないか、この絵面。

「うん、喘息…かな」

「先生にしては自信なさげですね、っていうか触っただけでわかるんですか？」

「触っただっていうか、体温とか脈とか呼吸音とかそういった感じのを診てただけだ」

不思議。

触っただけ、ねえ。

なんかすごくムカツとする。

苛々して仕方ない。

先生は医者だから、そう言い聞かせるのに止まらない。嫉妬という名の炎が私の中で燃えているのだろうか。

「そう苛立つな。別に捕って喰ったりしないわ、アホ」

心の中が筒抜けなもの、苛々する。

先生は大人だから簡単に流してくれるけど、友達同士になったら瞬間で嫌われちゃうのかな。

まあ、おにーちゃんが私のことを好きでいてくれればそれでいいけど。

「春崎先生には食われたくないですよ。もうおばさんじゃないですか。先生に食われるくらいなら海羽みづに食われるほうがましです」

「なんだ罹しほ麻、お前起きてたのか？その割にはずいぶん安定した…」

「先生たちがうるさくて起きたんです」
おにーちゃんはかけっぱなしだった眼鏡を外してベットの脇に置いた。

長い睫がより一層きれいに見えた。

「まったく、人が寝てるのに騒がないでほしいよ。まあ、海羽は違う意味でずいぶん騒がしく看病してくれてるみたいだからいいけど

な」

そう言つて笑いかけてくる。

つていうか、その笑顔が反則なんだよ！

「まあ、そんだけ文句たれる元気があるならそんなのつばつけときやそのうち治るだろ」

春崎先生はそういつて薬だけ置いて帰つて行つた。

「ったく、あの人はどうしてあんなに騒がしいんだか」

「まあ、薬をくれたんだからいいじゃん」

私は先生から受け取つた薬を開けてみた。

それは毒々しく、薬とは思えない黒だつた。

嵐の到来。(後書き)

…文化祭や体育祭で全然書けなかった。
これからもがんばらなくちゃ!

嵐の後の静けさ。

さて、春崎先生にもらった薬は例の如く色はおかしいながらも効いた。

不思議なくらい効いた。

そんなわけで俺は今、ベットのうえでごろごろしている。

いや、実際のところはもう休まずに仕事をしたいくらいなのだが、海羽^{みづ}に止められている。

海羽は俺を見張るようにつつとつきつきりで看病してくれている。

それは嬉しい、けどやることやってほしい。

兄として言わせてもらおうと勉強してほしい。

そこまで真面目なことはしなくてもいいが少しは社会に溶け込む努力というか、適応力を付けてほしい。

なんでかっていうと、海羽もかなり春崎先生に近い変人っぷりで学校もめんどくさいとか言って行かなかつたやつだ。

あの先生でさえ学校はきちんと通っていたのだから海羽にもしつかり通ってほしかった。

俺はそのころ通えなかつたから仕方がないとして、通える人には通ってほしいと思ってもいいじゃないか。

実を言うと俺は4歳から学校のプログラムを受けていた。

だから日常生活においての不自由っていうのは一切ないのだが、やっぱり学校には通いたかつたというのが本音だ。

別にみんなで群れてワーワーキヤーキヤーやりたいわけでもないが、友達の人や二人はほしかったと思う。

「おにーちゃん、薬効いた？」

海羽が聞いてくる。

俺としてはあの先生にあまりいい思い出がないのでぜんぜん効かなかつたといいたところなのだが、正直にいつて、ものすごく効いているのでうそはつけない。

「ああ、よく効いてるよ、今すぐ仕事ができるくらいな」
若干嫌味っぽく言ってしまった、とおれは気にしたのだが…
「ほんとっ?!よかったあ…!」
海羽はむしる喜んでるみたいだった。

俺の風邪が治って数日。

「よっ、罹^じ麻^お。げんきになりましたか?」

まるで赤ちゃんに聞くような口ぶりである。変態医師が勝手に乗り込んできた。

「おかげさまで」

「あたしのこのつばのおかげだな」

先生は不敵に微笑み舌を出す。

「やめてください。つばがたれます。気持ち悪いんで今すぐその舌をしまってください」

先生は海羽を探すようにきよるきよるする。

「海羽なら買い物に行ってますよ」

「そう、ムラムラしたら困るからな」

「はい、ムラムラしたら…って、しませんよ!!」

「そうかしら? 私は今の海羽ちゃんはとっても魅力的で食べたくなっちゃうのに」

「何言ってるんですか!」

「でも、間違って襲わないようにね」

「自信はありませんが善処します」

「あらあら、自信無いの?!だっさ、兄貴として」

「すみませんね」

先生はそれだけ言うとそのくさと帰り支度を始めた。

「もう、帰るんですか?」

「うん、今日はあんたの様子見だから、じゃっ」

そう言って帰ってしまった。

なんか、一人じゃさみしいな…。

嵐の後の静けさ。(後書き)

彼を部屋で一人にしてみたのですが、なにしでかすか楽しみです！
っていうか、海羽は家事できるのかな？
全部やってもらってそうだけど。

だから、私のせい…。

あんたのせい、っていうか私以外のみんなのせい。

私を置いて逃げたみんなのせい。

そんなのもわからないの？！

じゃあさ。

私の背中に負った傷はあんたの心の傷なんかより、もっと鮮明に痛みが伝わるってわかる？

ねえ、わかる？

わからないよね。

おにーちゃんがないのをいいことに、服を脱いで見せてあげたのを思い出す。

後ろで息をのむ声が懐かしい。

学校の火事。

それは幼いあたしが学校を怖くなるのには十分な理由だった。まして、だれにも助けられなかったなんて。

八年たった今謝りに来たのは、見かけたから。
そんなのって、あり？
だから、もう帰って。
私は親友に対してなんてことを言ったのだろうか。
まあいつか。
どうせ終わったことだし。
だから

あんたのせい、っていうか私以外のみんなのせい。
私を置いて逃げたみんなのせい。
そんなのもわからないの？！

なんていうセリフが出てきたのかな。
それにしてもあのタイミングでおにーちゃんが帰ってくるなんて。
なんていうか、もう。

私はバカ？

私のせいじゃない。

もう、弁解の余地もないほどに。

親友って言っても、名前すら出てこなかったけど。
自嘲気味に笑ってみた。

私はおにーちゃんに抱きしめられたまま考える。

いや、泣いていたから無心かもしれない。

とにかく、泣きたかった。

あの子はなんだったの？

いきなり私を乱して逃げてって。

ほんと何様？

しゃくりあげる私はおにーちゃんと初めて会ったころより幼かった
かもしれない。

最後に言われたあの言葉。

私を傷つけるためだけの言葉。

鋭く上がったあの言葉。

おにーちゃんも聞いていたはずなのに。

何と思わないのだろうか。

あんだのうちは親がないから、こっちの気持ちも分かんないのよ
！！

あの子の絶叫に近い声は、私たちに刺さったはずだ。
なのになぜ？

そう聞いてしまった。

聞いてしまったから答えたおにーちゃんも、そのあと後悔してたよ
うだ。

私の顔に出ていたのかもしれない。

ごめんなさいって感情が、出てたのかもしれない。

語り始めは、明るかったのに。

「俺はさ…

だから、私のせい…。(後書き)

なんかくだつぐだですみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9197w/>

空白のふたり

2011年10月28日17時16分発行